

現在、再発の兆候は認められていない。

演題7. 頸部悪性リンパ腫の超音波像について

○木村 正, 小豆島正典, 鈴木美智恵,
柳澤 泰, 中島 亨, 千田 薫,
坂巻 公男, 柳澤 融*

岩手医科大学歯学部歯科放射線学講座
岩手医科大学医学部放射線医学講座*

今回我々は、頸部腫瘍を主訴として来院した患者に対し超音波検査を施行し、この中から比較的典型像を示すとされる頸部の Malignant Lymphoma (以下 ML) について調査し、従来、鑑別が必要とされる Carcinoma の転移性リンパ節 (以下 meta.) との比較を行った。

対象症例は、頸部 ML 患者 19 例、扁平上皮癌患者 19 例で、検出されたリンパ節は ML ; 74 個, meta. ; 107 個であった。分析項目は大きさ, 形, 存在部位, 境界性, 内部エコーレベル, 均一性とした。

その結果、リンパ節の大きさが 15 mm 未満のものであるが、いずれも境界明瞭, 低エコー, 均一の Cystic pattern を示すものが多い。従って、超音波のみで両者を完全に鑑別するのは、困難のように考えられるが、しかし、現在使用している装置のみに限定して検討すると大きさ 15 mm 未満での Cystic pattern の分布は ML と meta. では異なっており、利用価値が高いと思われる。大きさが 15 mm 以上のものであるが、meta. では境界が不明瞭となり、内部エコーレベルが上昇し不均一になり、時には壊死巣を示す低エコー領域も認められるようになる。一方、ML でエコーレベルが低く、均一な超音波像が多い。そして、大きさ 50 mm 以上の Bulky mass と呼ばれる形態の large mass の形成は見られるが、壊死巣を示す様な所見は見られない。超音波検査は簡便で、リンパ節の検出率も高い、優れた検査法である。更に、装置の性能も日々向上しており、分解能に優れる 7.5 MHz のプローブが、導入されたので、今まで以上に高精度での検査が可能となっている。従って、今後もスクリーニングを含めた、頸部に対する routine な検査として、より高い有効性を持つものとする。

演題8. 国際ドイツ顎顔面外科シンポジウムに出席して
—頸部再建に対するインプラントの応用—

○大屋 高德

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座

10月7日から9日までの3日間、統一を記念して、旧東ドイツのロストック市で国際顎顔面外科シンポジウムが開催され、シンポジストとして発表する機会が与えられたと同時に、インプラントの臨床的応用基準やその基礎的な背景、さらには歯科学生への教育のあり方などが活発に論議されたので、これら要旨を報告した。

演題9. 光重合レジン重合条件の違いが細胞毒性に及ぼす影響

○小山田勇樹, 川嶋 敏宏, 久保田 稔,
名和橙黄雄*

岩手医科大学歯学部歯科保存学第一講座
岩手医科大学歯学部口腔解剖学第二講座*

[はじめに] 演者は第16回本総会において歯科材料細胞毒性試験に Flow Cytometry が応用できることを報告した。今回 Flow Cytometry による細胞毒性試験として、光重合レジンの重合条件と細胞毒性について検討したので報告する。

[材料および方法] 試験材料は、光重合型リベース材 REBARON LC (GC 社製)、レジンインレー用光重合型コンポジットレジン CLEARFIL CR INLAY (クラレ社製) を使用し、重合条件を 1. 光照射器のみ, 2. 光重合器により追加重合したもの, 3. 追加重合後 24 時間滅菌水中保管したものの 3 条件とし、培養液に浸漬し、試料とした。コントロールは培養液のみのものとした。細胞は、マウス頭蓋骨由来の MC 840106 株を使用し、各条件における細胞増殖性とセルサイクルの解析により評価した。固定は、-20℃の 70% エタノールで行い、染色は、Propidium iodide にて行なった。その後、Flow Cytometer (Ortho 社製 Spectrum III) にて核 DNA 量を測定し、このデータをもとにセルサイクルの解析をパーソナルコンピューターにて行った。なお、核 DNA 量の測定は、24 時間, 48 時間, 72 時間とし、Dean 法により解析した。

[実験結果ならびに考察] 光重合型リベース材の場合、重合条件により細胞増殖の程度は異なり、光照射器のみが最も低く、追加重合後滅菌水中保管が最もコント